

國學院大學学術情報リポジトリ

熊野参詣と五体王子

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, あかね メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001195

熊野参詣と五体王子

高 橋 あかね

はじめに

熊野信仰とは、熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社の熊野三山を中心とした信仰である。三社はそれぞれ個別に発達していたが、十一世紀後半頃に組織化し、貴人を中心に多くの人々に信仰された。その中でも、各地から熊野へと向かう「熊野参詣」は大きな特徴の一つである。道中には百社を超える、熊野王子社と総称される社が存在し、人々は王子社に詣でつつ熊野へと向かった。

参詣道中、数多く存在する王子社の中でも重視されたのが、本稿で扱う「五体王子」である。史料によって出入りがあるが、藤代王子（現・和歌山県海南市）・切目王子（現・同県日高郡印南町）・稲葉根王子（現・同県上富田町）など数社のことを指し、熊野三山の祭神である熊野十二所権現のうち、五所王子（若一王子・禪師宮・聖宮・児宮・

子守宮」という五座の神を祀るためこの名称であるとされる。五体王子についての研究は、多少の蓄積が認められるが、再検討を含めほぼ行われていない。

また、これまでの熊野信仰に関する研究は、熊野三山を中心に様々な視点から考察が行われてきた。成立過程についても、もとは本宮・新宮・那智の三社が個別に成立してきたものが、熊野参詣が隆盛する十一世紀後半頃に組織化していく中で、修行僧や別当、先達など仏教の影響を少なからず受けてきたことは既に指摘されている^②。

この変容は、三山という信仰における中心部

分のみならず、五体王子を含む道中の王子社にも同様に起こっていたと推測できる。王子社もそれぞれ個別に淵源を持っていたことは以前の拙稿で指摘しており、淵源の多くが在地の神であった可能性についても述べてきた^③。このような、地域的信仰が広い範囲で信仰される「熊野信仰」の中に再編成されていく様子は、十一世紀から十三世紀という古代から中世へ移行する中で、神祇がどのように変容していったのかのプロセスの一つにあたりと推測でき、この背景には当該時期の社会不安などによる、信仰面での変化が見られたことが影響すると思われる。

このような視点から熊野信仰の成立・発展過程を通すことで古代・中世移行期の神観の変容を窺うことができる

表1 熊野十二所権現表

社殿名			本地仏	総称	
上四社	第一殿	西御前 (結宮)	千手観音	両所権現	三所権現
	第二殿	中御前 (速玉宮)	薬師如来		
	第三殿	證誠殿	阿弥陀如来 (証誠大菩薩)		
	第四殿	若宮	十一面観音		
中四社	第五殿	禅師宮	地藏菩薩		五所王子
	第六殿	聖宮	竜樹菩薩		
	第七殿	児宮	如意輪観音		
	第八殿	子守宮	聖観音		
下四社	第九殿	一万宮 十万宮	文殊菩薩 普賢菩薩		四所明神
	第十殿	勧請十五所	釈迦如来		
	第十一殿	飛行夜叉	不動明王		
	第十二殿	米持金剛	毘沙門天		

『熊野三山の史的研究』『本宮町史』を参考に作成



図1 王子社・五体王子の位置

考え、本稿では、まずは定説とされてきた宮地直一の研究をはじめ、以降の先行研究を整理し、改めて近年の研究等を踏まえたうえで、五体王子の特徴について再検討を行う。

一、研究整理

五体王子に関する中心的な研究は宮地直一のものである。⁽⁴⁾ 宮地は、五体王子が特種の待遇を受けた王子社であると述べたうえで、大まかに以下の二点を特徴として挙げている。

まず一点目は、熊野参詣道の要衝に位置し、社頭の設備が他の王子社に比べ整っているとする点であり、五体王子が諸王子の中でも主要なものであったとする。二点目は、熊野十二社権現の内、五所王子を祀ったものという点である。熊野十二所権現についても少し詳しく述べると、主祭神である三所権現のほか眷属神（五所王子・四所明神）も含めた熊野の祭神を言う。五所王子は三所権現の御子神として扱われることが多い。また、宮地は五所王子の「五所」と五体王子の「五体」が同義のものであるとし、祭神が五体であることから、五体王子という名称になったこともあわせて述べている。

これら宮地の研究を基にしつつ、現在までの研究の中で五体王子に関する言及が複数みられる。まず、西田長男は、おおよその論を宮地と同じくし、五体王子の御前では特に馴子舞が舞われたことを指摘する。⁽⁵⁾ 馴子舞をはじめとした、五体王子の社頭で行われた芸能などに触れる研究は他にも見られる。王子社において、奉幣や御経供養などが行われたことは当時の古記録などからも確認できるが、その中でも五体王子で他では見られない芸能などが行われていたことを指摘するのは名波弘彰氏や、大河内智之氏、桑原康宏氏などの研究である。例として、馴子舞のほか、大規模な

歌会、相撲等が挙げられており、これも五体王子の特徴の一つとして挙げられることが多い。

ほかに、宮地も指摘している設備に関して触れるのは戸田芳実氏の研究である。戸田氏は社殿・堂舎・宿所・湯屋などの諸施設が整った拠点的な王子社を五体王子の特徴としており、五体王子の一つである藤代王子において里神楽が催されたときに現地の神官・巫女、社僧らが配置されていることに注目している。また、同時に藤代王子社が当時有していた社領が、伊太祁曾神社や鳴神社などの規模の大きな神社と同等レベルであったことも指摘する。

以上の研究をまとめると、五体王子の特徴は、①要衝に位置する、設備の整った拠点的な王子社、②熊野十二所権現の五所王子を祀った（勧請した）王子社、③大規模な歌会や馴子舞など、他の王子社には見られない芸能や儀式が行われる王子社、という三点になる。

ほかにもいくつかの王子に関わる研究の中で、五体王子について触れるものは散見するが、そのどれもが以上の三点を中心に述べている。三点はいずれも重要な要素ではあるが、冒頭でも触れたように五体王子に関する研究はこれ以降あまり広がりを見せておらず、また、これら先行研究の再検討も十分に行われていないと言える。

二、五体王子の成立背景

五体王子の史料上の初見は建仁元年（一二〇一）に同行した藤原定家が記録した、後鳥羽上皇の熊野参詣である。⁽¹⁾

九日朝出立頗遅ク間、已於王子御前有御経供養等云々、雖營参白拍子之間、雜人多立隔無路、強不能参逐電、攀昇藤代坂、^{五体王子}有相撲等云々、道崔嵬殆有恐、又眺望遼海非無興、^{湯澤代山}参塔下王子、次参桐下王子、

建仁元年の熊野参詣では、後鳥羽上皇は十月五日に平安京を出発し、同月八日に藤代の宿（現・和歌山県海南市）に到着、翌九日の朝に藤代王子に参詣している様子が記される。定家は出遅れたため、同地に到着した時には既に藤代王子社頭では御経供養等が終った後であった。その時、社頭では白拍子が行われており、また五体王子であるため相撲等が催されたと記している。

五体王子の社頭で行われた儀礼・芸能については第四章で詳述するが、ここで注目したいのは五体王子の初見記事が、十三世紀初頭という点である。王子社自体の初見は十一世紀後半であるため、五体王子が確認できるまでに一世紀以上の開きがあることになる。この十一世紀の王子社の初見から、五体王子が確認できるようになるまでの間に、道中の王子社は著しく増加しており、その中の数社が五体王子として史料上で記されるようになっていく。この点に留意しつつ、五体王子がどのような流れの中で成立したのか、本章では三山祭神の熊野十二所権現や、当時の社会背景などに触れつつ検討していきたい。

五体王子と熊野十二所権現

『長秋記』長承三年（一一三四）の鳥羽上皇・待賢門院の熊野参詣では、鳥羽上皇が先達⁽¹²⁾に十二所権現の本地を尋ねていることが記録されている。⁽¹³⁾

今夜、以^二便宜^一奏請云、鳥羽御堂用^二木瓦^一如何、仰云、可^レ然者、招^二先達^一、問^二護明本地^一、

丞相 和命家津王子 法形阿弥陀仏

両所 西宮結宮 女形 本地千手観音

中宮 早玉明神 俗形 本地薬師如来

已上三所

若宮 女形 本地十一面

禅師宮 俗形 本地地藏菩薩

聖宮 法形 本地竜樹菩薩

児宮 本地如意輪観音

子守 正観音

已上五所王子

一万普賢、十万文殊、勧請十五所、釈迦・飛行薬叉・不動尊・米持金剛童子・毗沙門天・礼殿守護金剛童子、、、也、
本宮人常好^レ眠、是若宮王子常寝給故云々、

この十二所権現の五所王子を祀ったのが五体王子である、という説があることは先に述べたとおりである。『頼資卿熊野詣記』承元四年（一二一〇）十月四日条や、鎌倉後期に成立したと考えられる『熊野権現金剛藏王宝殿造功日記』⁽¹⁵⁾では、「五所王子」のことを「五体王子」と記しているなど、祭神を示す名称として「五所」「五体」が同じように使用されている。この点は宮地や西田も指摘している点であり、本稿もこれによる。

冒頭でも触れたように、熊野が三山という形をとって組織化していくのは十一世紀後半であり、当初は十二所権現という名は見られず「三所権現」の名前が確認できるのみであった。⁽¹⁶⁾五所王子以下を合わせた十二所権現は天仁二年（一一〇九）の藤原宗忠の参詣によって『中右記』に記されたのが初期の例である。⁽¹⁷⁾十二所権現との関わりを踏まえ

ると、十二所権現が史料に確認できるよりも前に五体王子が存在する可能性は低い。この場合、諸王子の成立と、五体王子の成立には確実に時間差があると言え、五体王子は熊野参詣の最盛期である十二世紀末～十三世紀初頭に成立してくる比較的新しい存在であると推測できる。なお、後述するが、五体王子として名前が挙がる諸王子（藤代王子や切目王子等）自体は、十二世紀前半の参詣記に名前が確認できるものが多い。

古代・中世移行期の社会不安と熊野

前節で確認してきたように、五体王子は熊野参詣隆盛期の中で現れてくる存在であった。この時期を含む、熊野三山が全国的に信仰されるようになる十一世紀から十三世紀前後は、日本において社会不安が大きい時期でもある。熊野信仰が広く信仰されるようになる背景とも深く関わってくるため、簡単に確認する。

当該時期の社会不安についてはこれまでに様々な分野から研究がなされているが、近年では、当時の気候変動とそれに伴う災害・疫病の甚大化などが注目されている¹⁸⁾。特に気候変動が激しかったとされる時期からは多少外れているものの、王子社が史料に見え始めるようになる十一世紀も、洪水や旱魃などが繰り返す不安定な時期と重なっていた。気候変動によって短期間に繰り返される大雨や旱魃といった自然災害は、当時の人々の信仰面にも大きな影響を与えた。特徴的なものが、永承七年（一〇五二）に訪れるとされた末法である。

近日疫病漸以延蔓、此災年来連々無^レ絶、昔崇神天皇御宇七年、有疫、天下人大半亡没、于時天皇知其崇、忽以解謝、治^三馭天下^一百余年也、而今世路之人皆云、代及^三像末^一、（中略）今当^三斯時^一、災異鋒起、愚暗之人不^レ知^三理運之災^一、堯水湯旱難^レ免、

この『権記』の内容は、十一世紀初頭のものであるが、人々にとって自然災害も末法によるものであったと広く認識されていたことが窺える。また「而今世路之人皆云、代及三像末」とあることから、この頃人々の間では末法が訪れたという認識が、民衆を含め広く共有されていたと考えられている。

古代、国家側には政治が悪いと災害が起こるという認識があった。そして天皇は国土で起こる災害に責任を持っており、秩序を回復する祈願を行った⁽²⁰⁾。しかし、当該時期はそういった対策が機能しなくなり始めた時期でもあり、人々は現世利益などを求め個人で様々な方法を模索していった。自身による行動を重視するようになった結果の一つとして、靈験があるとされた社寺に自ら参詣する物詣が流行し始め、人々は個人として霊場の靈験に触れることを期待した⁽²¹⁾。その後、さらに平安京周辺から遠く離れた吉野や高野山など遠隔地への参詣も徐々に隆盛していき、院政期までには上皇らによる活発な熊野参詣へとつながっていく。

末法の世における王子

この社会不安は摂関院政期を通じて継続しており、古記録など貴人の視点の主になるが、長暦四年（一〇四〇）の外宮の顛倒⁽²²⁾、嘉承二年（一一〇七）に堀川天皇が崩じた際の藤原宗忠の記述⁽²³⁾や、元暦二年（一一八五）の大地震⁽²⁴⁾など社寺の倒壊や自然災害、争乱といった様々な事柄を末法と関係あるものとして捉えていた⁽²⁵⁾。

このような社会不安の中で、人々に広まったものの一つに本地垂迹説がある。本地垂迹は、仏や菩薩が日本の人々を救うために日本の神々の姿をとって現れたことを指す。本章の冒頭で触れた熊野十二所権現も、この考えの中で理解されていたといえる。十三世紀前半頃に成立した『平家物語』巻第二「康頼祝言」に記された願文では衆生を救済する神として、熊野の神々が認識されていたことを示す⁽²⁶⁾。

（前略）夫證城大菩薩は、濟度苦海の教主、三身圓滿の覺王也。或東方淨瑠璃醫王の主、衆病悉除の如来也。或南方補陀落能化の主、入重玄門の居士。若王子は娑婆世界の本土、施無畏者の居士、頂上の仏面を現じて、衆生の所願をみて給へり。（後略）

この場面は、鬼界ヶ島に流された平康頼らが、島に勧請した熊野権現の神前で読み上げた願文の一部分である。「證城大菩薩」は本宮（阿弥陀如来）、「東方淨瑠璃醫王の主」は新宮（薬師如来）、「南方補陀落能化の主」は那智（千手観音菩薩）をそれぞれ指し、その後「若王子は娑婆世界の本土」と若王子（十一面観音）が並べられる。三所権現に続くことや、本地が十一面観音であること、また複数の史料で「若王子」と記されることから、若王子は五所王子の若宮を指すと考えてよいと思われる。

右の「若王子は娑婆世界の本土、施無畏者の居士、頂上の仏面を現じて、衆生の所願をみて給へり。」という一文からは、若王子が衆生の願いを聞きいれる存在であると捉えることができる。類似する認識は十一世紀後半にも見られ、内侍尚侍藤原氏の熊野山への寄進状には、「権現王子眷属神等」に所願を伝えることを願っている。⁽²⁶⁾

王子がこういった認識をされていた点は、『梁塵秘抄』の「神の家の小公達は、八幡の若宮、熊野の若王子子守御前、比叡には山王十禅師、加茂には片岡貴船の大明神、⁽²⁹⁾」という歌や、金剛童子など、同時期の童子への信仰との関わりが考えられる。童子信仰については、小山聡子氏によってまとまった研究がなされている。⁽³⁰⁾ 小山氏の論によると、童子信仰は末法思想を背景の一つとして、平安中期以降に脇侍や眷属の中でも童子形をしたものへの信仰が盛んに行われるようになったところから童子信仰が成立したとする。これには、『往生要集』などに見える、現世やそこに生きる人々が穢れているという認識と、仏は穢れを嫌うという認識から、仏の代わりに人々を救済する存在としての童子

が期待されたと指摘する。

童子が穢れた現世であつてもそれを忘むことなく、浄土にいる仏の使者として現世に生きる衆生を救済する存在として信仰されていた、という小山氏の論は仏教側からの視点が主であるが、これは神祇の側でも類似した認識があつたと考えられる。この時期の神祇が果たした役割について、上島享氏は、仏では果たし得ない俗世における神独自の役割や機能を担うようになったと言及している^①。つまり、十二世紀以降、神々の本地が定まっていたとともに、神祇が地上にあつて人々を救済するという役割が明確になっていったという事である。上島氏は「和光同塵」をキーワードに、神は地上にあり、人々と常に向き合う存在であつたことを指摘しており、それにより三熱など人々が現世で受ける苦しみを引き受けて、人々に利益をもたらす力を持っていたとしたうえで、その力が仏菩薩以上であつたとしている。

十三世紀初頭に五体王子が確認できるようになるまでの間には、十一世紀以前から継続する気候変動やそれに伴うと考えられる社会不安などから、信仰面にも変化が見られた。それは、ここに挙げた童子信仰や本地垂迹など様々なものがあり、これらは同時期に上皇や貴人によって行われた熊野参詣によって、熊野三山やその道中にも持ち込まれたと考えられる。それらが受容された結果、十三世紀初頭の五体王子初見記事につながっていくのではないだろうか。熊野信仰における王子がどういふものであつたのか、という点は、今後の課題としたい。この時期の信仰を考える際、王子社の変容は改めて検討する必要がある。

三、五体王子周辺の地形

前章まで、五体王子の成立背景に注目し、社会不安や信仰面の変容から考察を行った。次に、藤代王子、切目王子といった個別の五体王子を例に具体的に検討していく。

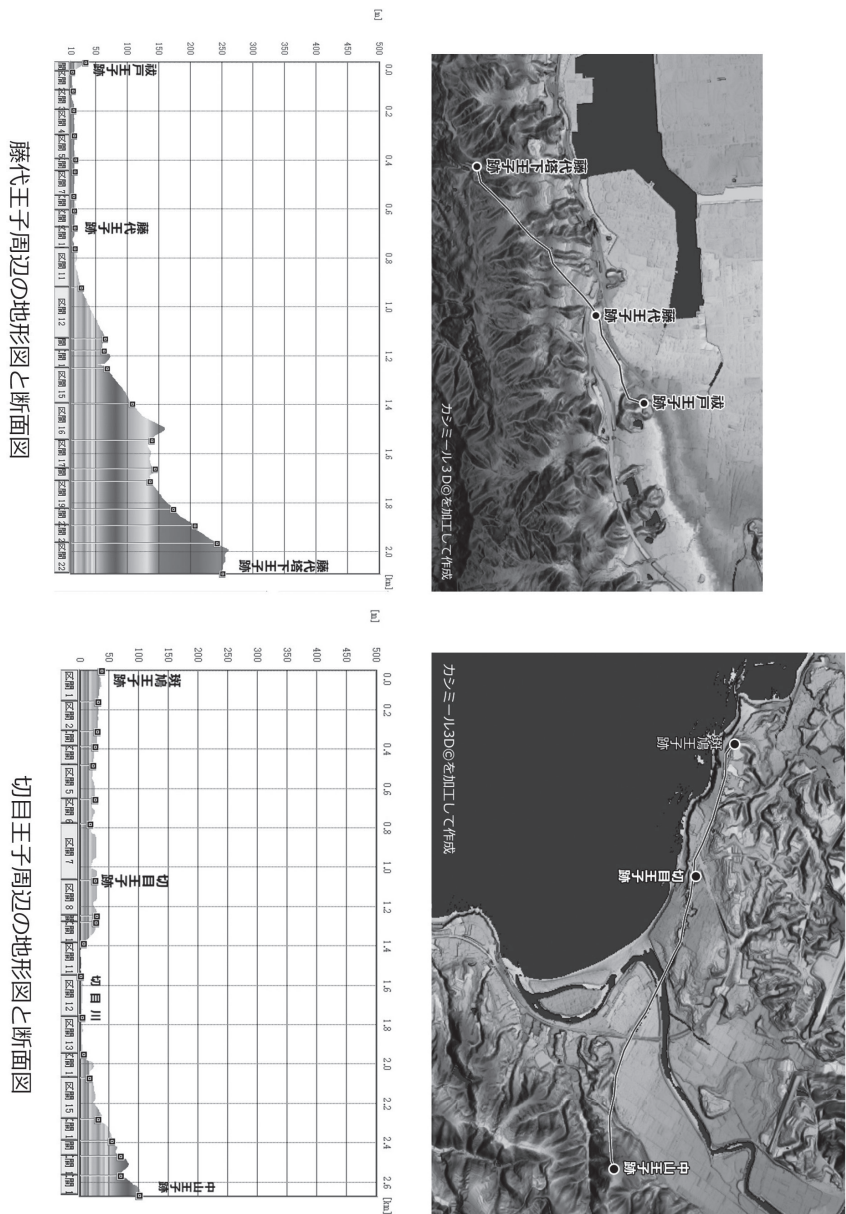
紀ノ川を渡った後、険しい峠に差し掛かる山の口に位置する藤代王子は、十二世紀の時点では他の諸王子と変わらないような「藤代王子」として、確認することができる。

御願寺大伝法院僧徒等重解 申請 天裁事

(中略) 宣旨云々、□伝聞、其四至内於神社仏寺領者、自_二往古_一于今、不_レ勤_二彼神役_一、所謂東大寺末寺崇敬寺領木本庄・金剛峯寺領小倉庄西傍示内土崎村・仁和寺喜多院末寺薬勝寺領・伊太祁曾・鳴神・藤代王子等所_(附7)□也、而一部四院之内、悉勤来此役之处、山東庄致_(附7)□□之由訴申之條、不可説事也、(後略)

この史料は、日前宮の神役を勤めない神社仏寺領を挙げている。藤代王子は其中で伊太祁曾神社や鳴神社という紀伊国の大社等と並び、既に一定の所領を有している社として認識されていたことが分かる。藤代王子の王子としての初見はこの記事であり、五体王子として史料に出てくる以前から、規模の大きな王子であったことが明らかである。

藤代王子以外の切目王子や滝尻王子なども、それぞれ最初から五体王子として確認できるものはない。それぞれ十三世紀初頭以降、五体王子として史料に記されるようになっていった。次節以降では、五体王子が他の王子と区別された理由について切目王子を具体例として検討する。

図2 五体王子近辺地形図・標高図⁽³³⁾

まず注目されるのは、宮地などが指摘した、五体王子が交通の要衝に位置するという点である。交通の要衝となる場所は、峠や港湾など地形が特徴的である場合が多い。例として地形図・断面図を挙げた藤代王子と切目王子の二社は、どちらも地形に特徴がみられる場所に位置することが分かる。それぞれ、藤代王子は急峻な峠の直前に位置し、切目王子は渡河地点の直前に位置している。このような地点は人々が一旦とどまらざるを得ない場所として、宿所などが整えられ、拠点化していった。

熊野参詣道の道沿いには、貴人などが参詣した際に宿所として利用した拠点が点在している。それらは、場所によつて差異があるが、基本的には諸国司や莊園関係者が用意したものであったことが参詣記などからも窺える。その中には五体王子である、藤代・切目・滝尻・発心門等において宿泊する記述も見え、院政期を通じて上皇や貴人等の宿所として固定化していく。これに関しては、熊野参詣の隆盛に伴い御師が宿所を提供するようになった関連性が既に指摘されている。⁽³⁴⁾

さらに『修明門院熊野御幸記』では、神楽を奉納する際「本社八女八人、唱人五人祇候、八女鬘⁽³⁵⁾袖」とあるように、藤代王子に所属すると思われる巫女等が神楽を舞っている。『修明門院熊野御幸記』において藤代王子以外に「八女」の表記がみられ、八女や唱人がその場所に所属していると推測される場所は、大渡王子（窪津王子）・本宮・新宮のほかには五体王子である切目王子・稲葉根王子・滝尻王子のみである。⁽³⁶⁾熊野参詣道の起点に位置する大渡王子や、本宮・新宮といった熊野参詣において重要な意味を持つ場所と同等の儀礼が行える場所として、五体王子が挙げられている。このほかにも五体王子では規模の大きな馴子舞や、相撲、歌会などが行われており、それらに対応可能な設備が十分に整っていたことが推測できる点からも、他の王子社との差異が明らかである。

地形に視点を戻してみると、藤代王子や切目王子社周辺に見られるような交通上の難所や結節点には、古代から

往来する人々を見守る神、「坐す神」が認識されていた。³⁷⁾ 古代・中世は現在よりも自然が起す現象やその周辺の地形に影響を多く受けており、その中で人々は特徴的な働きをする地形や環境に神を認識していたのである。

先ほど挙げた『平家物語』『康頼祝言』において康頼たちが鬼界ヶ島で熊野詣のまねをした際も、島の中で山や海、滝といった熊野に似た地勢に三山や王子社を見立てており、当該時期の人々にとっても、熊野とその地形や環境は深く結びついたものであったことが窺える。

地主神から切目王子へ

五体王子の一つ、切目王子にはこういった特徴的な地形に坐す神を思わせるような説話が残っている。鎌倉時代初期までに成立したとされる『諸山縁起』の第二項には、熊野の神が「麓乱神」「荒れ乱るる山神」と表現されたうえで、その位置する場所として発心門、滝本、切目が挙げられている。³⁸⁾

「熊野の本土は麓乱神なり。人の生氣を取り、善道を妨ぐる者なり。常に忿怒の心を発して非常を致すなり。時々山内に走り散りて、人を動かし、必ず下向する人のその利生を妨ぐ。」(中略) その処は、一に発心門、二に滝本、三に切目なり。山中に何の笠をば尤もにせん。椰木の葉は何ぞ。荒れ乱るる山神、近く付かざる料なり。金剛童子の三昧耶形なり。

「滝本」が那智の滝本を指すか、滝尻を指すかは明確ではないが、麓乱神が存在する場所として五体王子の所在地が大部分を占めるのは注目すべきである。そして、熊野参詣から下向する人々を妨げるといふ、道中に危険をもたらす

「鹿乱神」はもともこの地に存在した地主神であつたと捉えることができる。

切目の中山の谷の口に面を莊りて、また女に値ふ。見るに凶形なり。怖畏の心起こるべし。「そもそも汝は何人なるぞ」と問ふに、かの女答えて云はく、「我は道人を食となす鬼なり。回法の人貴く御す。我極めて苦しみ重し。助け給へ。如何」と云ふ。再拝し回音するに、鬼形小く成る。いかに況んや、神呪を聞きて賀ぶをや。「我、礼拝して人を食する心亡び遠去る」と。上に隠れ了んぬ。清浄にして隠れ了んぬ。

同じく『諸山縁起』内、第四項の役行者の「熊野山参詣日記」とされる部分には、道中で様々な困難に出会い、それを克服していく様子が記される。その内の一つでは切目の中山の谷の口で、鬼であるという救いを求める女に出会い、役行者が神呪を唱えることで鬼は苦しみから救済されている。

特定の場所に居たとされる山神などが人々に不利益を与え、それを僧侶や外部の人間が追放したり調伏したりすると言った説話は各地にみられる。これは仏教が地域社会に広がっていく過程でたびたび起こった、地主神と仏教との対立を表していると考えられ、僧侶たちは中国の仏教説話を用いて神身離脱を語り、地方布教を進めることもあったという。⁽³⁹⁾

切目に関する『諸山縁起』の説話も類似例として捉えることができる。第二項の「山中に何の笠をば尤もにせん。椰木の葉は何ぞ。荒れ乱るる山神、近く付かざる料なり。金剛童子の三昧耶形なり。」という、笠に椰木の葉を挿すという行為は永保元年（一〇八一）の藤原為房の熊野参詣道中、まだ王子社として記される以前、切目山を通りかかった際にも見られ、これは切目王子が記されるようになって以後も参詣の際に決まって行われていた。切目

王子が参詣記に記されるようになる以前から行われていることから、切目山という特定の場所が重視されていたといえる。

また、特定の行為によって災難を逃れるというのは、切目王子と関わりの深い、豆の粉化粧説話にも見られる。この説話は文安三年（一四四六）書写の宮内庁書陵部所蔵『後崇光院宸筆宝蔵絵詞』として伝わっている。僧を死なせてしまった罰として右足を切られ、切部山に放たれた切目王子が参詣者の幸福を奪うため、それを免れるために切目王子が苦手とする豆の粉や椰の葉をつけるようになった内容が描かれる。⁽⁴⁾この説話では切目王子は地主の神ではなく、熊野権現の命を受ける王子として登場するが、切目山という要衝で往来する人々を襲い、椰の葉によって退けられるという性格は、先に挙げた説話と共通点を多く持つ。切目山の在地の神は、こういった背景を持って王子社として熊野信仰の中に位置づけられていたのではないだろうか。

切目という土地は、ここまで見てきたように山が特徴的な地形として認識されているが、「内海と外海の境目」に位置し、熊野への入り口と言われた航海上の難所でもあったため、水陸交通の結節点としても機能していた可能性が高い。冒頭でも触れたように、このような特徴的な地形を持つ場所には古くから神が意識され、祀られたと考えられる。

切目王子は交通の要衝に鎮座する在地の神として存在したが、社会が大きく変化し、熊野信仰の中に位置づけられて行く中で、その性格を変容させていったと推測できる。これを気候変動をはじめとした社会不安の中で神観が変化していく実例として、また、古代から中世への神観の変化の一端と捉えたい。

紙幅の都合上、切目王子のみとなったが、峠の入り口にある藤代王子や川沿いの道から山道へ分け入る手前に位置する滝尻王子など、五体王子として選別された理由の一つに、周辺の地形や環境が大きく影響した可能性は高い。

四、五体王子と儀礼

最後に、五体王子での儀礼をみていきたい。王子社の社頭では、特に上皇や女院が参詣した際、様々な儀礼や芸能が行われていた。その内容は、時代によって多少の違いはあるが、おおよそ奉幣・御燈明供養・御経供養と、里神楽や馴子舞といった芸能に固定化されている。

熊野参詣道中の儀礼について詳しい記述がある『修明門院熊野御幸記』承元四年（一二一〇）四月二十一日条では、淀川を下ったところにある大渡王子で以下のような内容が行われた。⁽¹⁴⁾

未刻著^二御渡部^一、^{拂御船寄}打板^也寄^二御輿^一、即参^二御大渡王子^一、

先行事^二庁官打^二御正体絵馬^一、八女等於^三神殿^一、^(脱アルカ)次御幣宗行朝臣取^レ之授^二御先達^一申^レ祝、給^二小先達^一、々々々給^二

庁官、々々置^二宝前^一、次供^二御燈明^一、^{三木丁上居小土器處}次御経供養事有^レ之、^{之、燃火、庁官同役、之、折敷、庁官役、之、}御導師隆円僧都敷^二床子^一、

相^二具打鳴^一啓白、不^レ給^二布施^一、次里神楽、鼓笛一声、夕日之間断腸、神豈無^二冥助^一哉、庁官給^レ禄、^{正朝各一疋}

次公卿已下有^二馴子舞^一、非^レ無^レ輿、予殊以無^二其骨^一、太以難^レ堪、王子御前事、後々以^レ之可^二准知^一、

大渡王子の社頭で行われた儀礼は、「王子御前事、後々以^レ之可^二准知^一、」と最後の一文に書かれていることから、この後出てくる諸王子社でも基本的にはこの内容を基に行われていたと考えられる。これは同じ参詣記内、二十三日条の井口王子での「御奉幣・馴子舞已下如^レ例」や、二十四日条の道中「山中・山口・四橋・中村等王子御参如^レ常」といった記述が見えることから明らかに明らかである。

このように参詣記の記述内容を確認していくと、五体王子、諸王子の別なく様々な儀礼や祭礼が社頭で行われていたことが分かる。しかし、その中でも特に五体王子社のみで行われたものもいくつかある。数が少ないため、それぞれの箇所を抜粋すると以下の通りである。

『熊野行幸日記』建仁元年（一二〇一）十月八・九日（『神道大系』）

八日（前略）次参^三祓戸王子、 次入^三藤代宿、不及御所三町許小宅也窮屈平臥、

九日朝出立頗遅々間、已於^三王子御前^一有^二御経供養等^二云々、雖^二營参^二白拍子之間、雜人多立隔無^レ路、強不^レ能^レ参逐電、攀^二昇藤代坂^一、五体王子、有相摸等云々。道崔嵬殆有^レ恐、又眺望遼海非^レ無^レ興、湯津代山参^二塔下王子^一、次参^二桐下王子^一、

『熊野行幸日記』建仁元年（一二〇一）十月十三日条（『神道大系』）

十三日、天晴（中略）次稻葉根王子、此王子准五体王子、毎事過左云々。御幸之寓同五体王子云々。

『修明門院熊野御幸記』承元四年（一二一〇）四月二十三日（『神道大系』）

廿三日、庚辰、（中略）次扱井繩手之田畝以北儲^{（櫻井）}御輿、為^二乘御^一也、次参^二御同王子^一、五体王子内也仍御先達已下皆悉有^二馴子舞^一、次参^二御厩戸王子^一、（後略）

『修明門院熊野御幸記』承元四年（一二一〇）四月二十四・二十五日（『神道大系』）

廿四日（中略）直参^二藤代御宿^一、入御已餘^二一時^一云々、

入^レ夜夕御浴・御拜如^レ常、国司御儲如^レ例、

廿五日、壬午、朝御浴・御拜・御禊、了出御、参^二御藤白王子^一、依^二五躰王子^一御先達已下有^二馴子舞^一、其外事一
如^レ例、

但御神楽、本社八女八人、唱人五人祇候、八女釵^レ袖、里神楽如^レ例、事了廳官給^レ祿、
里神楽祿如^レ例、
八女各絹一疋、
唱人白布各一反、

懺法僧廿口列^二居礼殿^一、供米各一斗、布一反、廳分給^レ之、

次自^二坂下^一有^二御歩^一、仍人々皆以前行、拂^二退雑人^一、峯漸近程儲^二御輿^一、為^二乗御^一也、次於^二当下^{（⁴⁵）}有^二御禊^一、
其儀如^レ例、

『修明門院熊野御幸記』承元四年（一二二〇）四月二十八日（『神道大系』）

廿八日（中略）次巡^二稲葉山麓^一、参^二御稲葉根王子^一、御奉幣已下如^レ常、
八女八人唱人二人、各白布一反給之、
懺法僧廿口、各供米一斗、布一反給之、五躰王子之間、

御先達已下馴子舞、次於^二石田^一瀬一有^二御昼養^一、

全体を簡単に確認すると、五体王子であるため、という注記がされるのは「御先達已下馴子舞」と、「相撲等」の
二つ、祭礼に関する事柄であることが分かる。

馴子舞とは、周囲の人々に囃されつつ、即興的な歌を歌って舞うのが基本であつたとされた舞である。^{（45）} 馴子舞につ
いては、先行研究でも五体王子でしか行われなかったとする説も見られるが、それぞれの規模は明らかではないもの
の「公卿衆已下」の馴子舞が行われる王子社以外に、五体王子など拠点となるような場所では「御先達已下」の馴子

舞が行われたとするのが正しいだろう。この差は、馴子舞の規模だと考えられる。

今度御供人数

修明門院御幸人数

御先達

大僧正

御導師

大納言僧都隆円

女房六人

民部卿殿 大納言殿 丹後殿已上 常御所女房 宮内卿殿 大輔殿 出雲殿

雑仕一人 小雑仕一人 女官一人 刀自一人

公卿

民部卿 源宰相中将

殿上人

一条少将^皇、権弁^皇、藤少納言頼一、

上北面

木工権頭清実 大隅守康業 佐馬権頭忠綱 左近大夫信経 藏人康定

下北面

隼人正成重 壹岐左衛門尉久政 主馬左衛門尉秀能

西面

源二兵衛尉湛、新藤兵衛尉景家、糟屋三郎有久

医師

侍医基成

陰陽師

陰陽権助晴光

主典代一人 庁官四人 庁守一人

召使八人 召次十五人

御密召次一人・京召次四人・国召次十人

鑑取一人 御力者十八人 次御輿御力者卅六人

番衆六人 大炊二人 貳原一人

進物所召次一人 釜殿六人 里神樂六人

右に挙げた『修明門院熊野御幸記』⁽⁴⁶⁾の御供人について記された箇所を確認すると、御先達、御導師、女房、雑仕、小雑仕、女官、刀自、その後に公卿や殿上人、上下北面などが続く。これは参詣に同行した人々を序列順に示したものであると考えられ、その場合「御先達已下」の馴子舞は、「公卿已下」馴子舞よりも規模が大きく、参詣に同行したほぼ全員が参加したものであったことが推測される。「先達已下」馴子舞や、相撲などといった大規模な儀礼を行うことができるのは、五体王子の設備が他の王子社よりも整ったものであったことも影響するのではないだろうか。

馴子舞や相撲等、王子社で芸能が奉納されるようになったのは、十二世紀以降の鳥羽上皇の参詣が画期であると考えられる。⁽⁴⁷⁾十三世紀初頭の熊野参詣最盛期には、「里神楽六人」が見えるように、上皇や女院に同行し道中で芸能を担う人々がいた。一方、第三章で見たような、五体王子など拠点となったような場所に所属する巫女や唱人もおり、京の芸能が地方の芸能と交わることになる。⁽⁴⁸⁾鳥羽上皇以降、馴子舞に限らず白拍子や里神楽といった祭礼が王子社で行われるようになり、院政期を通してその内容は徐々に華やかなものになっていった。

交通の要衝での儀礼

熊野参詣道中で見られる儀礼などは、広い視野で見ると、同時期全国的に見られたものであったとも推測できる。熊野王子社が文献資料などで確認できるようになると同じ十二世紀頃、交通の要衝として知られた塩津港（琵琶湖の北端に位置）の近くに鎮座していた神社でも同じような儀礼が行われていた可能性が指摘されている。塩津は、平安京と北陸・東北を結ぶ要衝であるとともに、水陸交通の結節点としての性格も持っており、早くから物流の拠点ともなる地点であった。笹生衛氏の研究では、塩津港遺跡の神社境内は十二世紀を境に、瑞垣で囲まれた限られた人々の祭祀の場から、不特定多数の人々が集まるオープンな場へと変化していったとしている。⁽⁴⁹⁾遺構からはカワラケ小

皿や、幣串のほか遊戯具などもみられ、『年中行事絵巻』との比較からも十二世紀、交通の要衝に位置した神社で行われた儀礼や芸能は開かれたものであったといえる。

規模や性格に差異はあるが、本稿で検討してきた五体王子も確認したように交通の要衝に位置し、また人々が集まる場や施設も充実していた拠点であった。その社頭で行われた儀礼や芸能には、参詣記に記されるように、大勢による馴子舞や、相撲などがあり、それを見物する人々は、参詣に訪れた貴人やその同行者だけではなく、実際に当時の社頭で行われた儀礼の雰囲気伝える史料がある。

八日（前略）次参^三祓戸王子、 次入^三藤代宿、 窮屈平臥、

不及御所三町許小宅也

九日朝出立頗遅ク間、已於^三王子御前^一有^三御経供養等^二云々、雖^三營参^一白拍子之間、雑人多立隔無^レ路、強不^レ能^レ参逐電、攀^三昇藤代坂^一、五体王子、有相撲等云々、道崔嵬殆有^レ恐、又眺望遼海非^レ無^レ興、通熊代山参^三塔下王子^一、次参^三桐下王子^一、

第二章冒頭で取り上げた五体王子初見の史料でもあるこの記事は、藤代王子で白拍子が行われていた情景が記される⁽⁵⁰⁾。定家が藤代王子に到着した時、周辺は「雑人多立隔無^レ路」という状態であり、庶民も多くその様子を見ていたことが分かる。これ以外の参詣記にもたびたび「雑人」を散らした、という記述があり、王子社での儀礼・祭礼は多くの人々がにぎやかに見ることでできる場であったことが窺える。

塩津と王子社で行われた儀礼を比較した場合、塩津は規模の大きな港湾であるため、参詣路の難所近くに位置する王子社とはまた違った性格を持つ。しかし、両者はいくつかの共通点を持つ景観であるとも言える。こういった同様の祭礼は、十一世紀後半からの平安京を中心とした物流の活発化によって、全国の交通の要衝に鎮座した神社で行われて

いた可能性も考えられる。これらを持ち込んだ人々は、参詣を行った上皇や貴人、彼らを先導した僧侶たちの影響が大きいと推測できるが、参詣を支えた奉仕者である「下人」たち⁽⁹⁾等を含めた、庶民という存在の影響も今後の研究で検討する必要がある。

まとめ

本稿では、五体王子に関する先行研究の再検討を中心に、五体王子の成立や背景について考察を行ってきた。

先行研究にみえる五体王子は①要衝に位置する、設備の整った拠点的な王子社、②熊野十二所権現の五所王子を祀った（勧請した）王子社、③大規模な歌会や馴子舞など、他の王子社には見られない芸能や儀式が行われる王子社である、の三点にまとめられる。

結論として、①、②の点は、現在の研究から再検討してもほぼ妥当であるといえる。③は行われる場所の規模による差異はあるが、馴子舞をはじめ、様々な儀礼は他の王子社でも行われていたことを参詣記などから確認した。また、王子社に限らず、当該時期に全国的に行われていた可能性についても塩津港遺跡の神社跡と比較し、その可能性を指摘した。

①、②の点は、古代・中世移行期の社会不安に触れたうえで、五体王子として参詣記に確認できるようになるまでの過程を文献資料や地形図を用いながら検討した。当該時期の信仰面の変容とあわせて、五体王子の一社である切目王子の説話に注目し、古代・中世移行期に在地でどのような変化が起こったのかの具体例として捉えられる可能性を指摘した。ただし、本稿で扱ったのは切目王子の例のみであるため、今後他の五体王子も個別検討することで整合性

があるか確認する必要がある。

五体王子社だけでなく熊野王子社という存在は、熊野信仰の中で完結するものではなく、当時の日本の信仰面を考える上でも重要な部分に位置づけられることが推測される。王子社そのものの性格や役割については改めて検討する必要があるが、この点は今後の課題としたい。

註

(1) 他の五体王子として、榎井（榎井）王子（現・大阪府泉佐野市）、滝尻王子（現・和歌山県田辺市）、発心門王子（現・和歌山県田辺市）などが挙げられる。本稿では史料の関係上、藤代王子を中心に、切目王子、稲葉根王子を取り扱う。

(2) 宮地直一「第二編 三山の発達時代」（同『熊野三山の史的研究』国民信仰研究所、一九五四）。大河内智之「熊野―聖地への旅」（和歌山県立博物館編『熊野―聖地への旅』二〇一四）一八〇～一八一頁。

(3) 拙稿「十～十二世紀における熊野王子社―その成立と展開―」（『神道研究集録』三五、二〇二二）、同「古代・中世移行期の交通路と熊野王子社の成立背景―窪津王子を中心に―」（『國學院大學大學院紀要―文学研究科―』五三、二〇二二）

(4) 註2論文。「第六編 三山の総合的考察」三九六～三九八頁。

(5) 西田長男「熊野九十九王子考」（『神道研究選集』第四卷 神道史の研究第二、クレス出版、二〇一四、初出：一九六六）三〇〇～三〇二頁

- (6) 名波弘彰「院政期の熊野詣」『文藝言語研究』文藝篇一三、一九八八) 三三頁
- (7) 大河内智之「熊野―聖地への旅―」(和歌山県立博物館編『熊野―聖地への旅―』二〇一四) 一八二頁
- (8) 桑原康宏「2 藩政時代の熊野街道の伝馬所」(同『熊野の集落と地名』清文堂出版、一九九九) 二六頁
- (9) 戸田芳美「初期中世の熊野路」(同『歴史と古道―歩いて学ぶ中世史―』人文書院、一九九二) 九二―九三頁
- (10) 小山靖憲『熊野古道』岩波書店、二〇〇〇、九七―九八頁。和歌山県教育委員会編『熊野参詣道王子社及び関連文化財学術調査報告書』二〇一二、二七頁。高木徳郎『歴史の旅 熊野古道を歩く』吉川弘文館、二〇一四、七―八頁、などが挙げられる。

(11) 『熊野行幸日記』建仁元年(一二二一)十月九日条(『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四)以下、史料内の傍線部は筆者による。

(12) 王子社初見記事『大御記抄』永保元年(二〇八二)九月二十四日条(『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四) 廿四日丁未、

西刻、著三根王子傍之小堂、先奉幣、王子之神□又供燈明□□王子之宝殿同之、

この史料のほか、十世紀頃成立とされる『いほぬし』にも「わうじのいはや」という名称がすでに確認できる。

(13) 『長秋記』長承三年(一一三四)二月一日条(増補史料大成)一七、一九六五) 返り点は筆者による。

(14) 『頼資卿熊野詣記』承元四年(一一二〇)十月四日条(『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四)

四日、己未、乘三小船三参新宮、即奉幣、当時長嚴僧正給三阿波国三奉三造三替假神殿、在本御殿後三十二所相雙給、

予於三宝前三拜三蛇出三假殿、若宮殿下蚊入三新造五躰王子下三給、神人吉事也、早可三奉拜三之由示三予、ク・

阿闍梨実浄兩人拜^レ之、

- (15) 本資料は近年、川崎剛志氏の研究〔第二節『熊野権現金剛藏王宝殿造功日記』という偽書〕〈修験の縁起の研究―正当な起源と歴史の創出と受容― 和泉書院、二〇二一〉などで偽書であることが指摘されている。本稿では、資料の撰述時期が鎌倉後期にあたることから、五所王子と五体王子の関連が当該期までには確認でき、ことに注目する。

- (16) 註12文献、『大御記』^抄 永保元年（一〇八二）十月五日条の「三所之御殿」、「熊野本宮別当三綱大衆等解」永保三年九月四日（『田辺市史』第四卷史料編Ⅰ、一 古代史料、一九九四、六四〇頁）の「三所権現」など。

- (17) 『中右記』 天仁二年（一一〇九）十月二十六日条（『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四）

廿六日、丁酉、鶏鳴之後浴^二寒水^一解除、参^二御前^一、先参^二証誠殿^一、^{一棟}次参^二両所権現御前^一、^{一所二棟}次参^二若宮王子御前^一、^{一棟}次参^二便五所王子幣五棟進残四王子一所^一、次参^二一万眷属・十万金剛童子・勧請十五所・飛行夜叉・米持金剛童子・総社^一、

^{一所横炎幣四棟、無之天}（後略）

- (18) 中塚武監修、伊藤啓介・田村憲美・水野章二編『気候変動から読みなおす日本史④気候変動と中世社会』臨川書店、二〇二〇。水野章二『災害と生きる中世 旱魃・洪水・大風・害虫』吉川弘文館、二〇二一。中塚武『気候適応の日本史 人新世をのりこえる視点』吉川弘文館、二〇二二など。

- (19) 『権記』長保二年（二〇〇〇）六月二十日条（『増補史料大成』四、一九八二）返り点は筆者による。

- (20) 岡田莊司「終章 古代の天皇祭祀と災い」（同『古代天皇と神祇の祭祀体系』吉川弘文館、二〇二二）二九七～三〇三頁

- (21) 速水侑『『今昔物語集』における霊場参詣勧進説話の形成』（同『平安仏教と末法思想』吉川弘文館、

二〇〇六 二九二頁

- (22) 『春記』長暦四年（一〇四〇）八月二十三日条（『増補史料大成』七、一九八一）
- (23) 『中右記』嘉承二年（一一〇七）七月十九日条（『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四）
- (24) 『玉葉』元暦二年（一一八五）七月九日条
- (25) 高木豊「第二章 末法意識の様相」（同『平安時代法華仏教史研究』平楽寺書店、一九七三）九三～一二五頁
- (26) 『平家物語』卷第二、康頼祝言（日本古典文学大系三二『平家物語』上、一九五九）
- (27) 註2 論文。「三山祭神の組織 上」三七四～三七五頁
- (28) 「内侍尚侍藤原氏寄進条案」応徳三年（一〇八六）（『熊野那智大社文書』米良文書、一九七四）
- (29) 王子と金剛童子のかかわりについては、註4 文献に詳しい。
- (30) 小山聡子『護法童子信仰の研究』自照社出版、二〇〇三
- (31) 上島享「中世の神と仏―（神仏習合）再考―」（吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』名古屋大学出版会、二〇二二）六一〇～六三〇頁
- (32) 『紀伊国大伝法院僧徒重解案』応保二年（一一六二）『平安遺文』三三三四
- (33) 熊野参詣道の経路は、歴史の道調査報告書集成3『近畿地方の歴史の道（3）和歌山』（原本編集和歌山県教育委員会、海路書院、二〇〇五）を参照した。
- (34) 宝月圭吾「熊野詣と御師の発達に就いて」（宮家準編『熊野信仰』雄山閣、一九九〇、初出…一九三三）二一六頁
- (35) 『修明門院熊野御幸記』承元四年（一二二〇）四月二十四日（『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四）

- (36) 山路興造「熊野三山と芸能―『修明門院熊野御幸記』を中心に―」(『芸能史研究』二〇三、二〇一三) 二一頁
- (37) 笹生衛「塩津港の神と神社」(水野章二編『よみがえる港・塩津』サンライズ出版、二〇二〇) 六〇～六一頁
- (38) 『諸山縁起』(日本思想大系二〇『寺社縁起』、一九七五)
- (39) 註31文献。五七〇～五七六頁
- (40) 『大御記^抄』永保元年(一〇八二)十月九日条(『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四)
 九日、壬戌、(中略)酉刻著^二日高郡司友高之宅、事儲豊贍也、此日於^三切戸山、取^三奈木葉^一挿^レ笠、
- (41) 本文は、石塚一雄「後崇光院宸筆宝蔵絵詞」(『宮内庁書陵部紀要』二一、一九六九)を参照した。切目王子の説話は鈴木宗朔「熊野参詣儀礼の記録と説話―切目王子の豆の粉化粧説話をめぐって―」(新典社研究叢書九一『古文学の流域』新典社、一九九六)や山本陽子「熊野曼荼羅に見る神仏のヒエラルキー―切目王子を中心に―」(大橋一章・新川登亀男編『仏教』文明の受容と君主権の構築―東アジアの中の日本―)勉誠出版、二〇一二)などに詳しい。
- (42) 和歌山県教育委員会編『熊野参詣道王子社及び関連文化財学術調査報告書』二〇一二、四二頁
- (43) 笹生衛「『災い』神を変えろ―九・十世紀における災害対応と神の勧請―」(『神道宗教』二六四・二六五、二〇二二)
- (44) 『修明門院熊野御幸記』承元四年(一二二〇)四月二十一日条(『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四)
- (45) 註37文献。二二～二三頁
- (46) 『修明門院熊野御幸記』承元四年(一二二〇)五月十二日条(『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四)
- (47) 五味文彦「上皇の熊野御幸について」(三井記念美術館、明月記研究会編『国宝 熊野御幸記』八木書店、

二〇〇九）一三八頁

- (48) 中本真人「第一章 熊野御幸の里神楽・御神楽と芸能」(同『内侍所御神楽と歌謡』武蔵野書院、二〇二〇) 一四三～一四八頁

- (49) 註36文献。笹生衛「水陸交通の結節点―琵琶湖塩津港遺跡と神社―港湾における古代祭祀と中世への変質―」(古代交通研究会 第二十一回大会資料集『古代・中世移行期の交通と祭祀―北陸道・山陰道の水上交通・陸上交通を中心に―』二〇二二年六月二十六・二十七日開催)。

- (50) 『熊野行幸日記』建仁元年(二〇二)十月八・九日(『神道大系』文学編五 参詣記、一九八四)

- (51) 熊野参詣を支えた民衆については、戸田芳実「院政期熊野詣と公家領荘園―奉仕者としての民衆を中心に―」(同『歴史と古道―歩いて学ぶ中世史―』人文書院、一九九二、初出…一九七八)に詳しい。

〔付記〕 研究開発推進機構学術資料センター(神道資料館部門)では、継続して宮地直一旧蔵資料の整理・調査作業を行っている。本稿は、その内の王子社に関する資料を整理・調査した成果の一環である。